
天使がくれた宝物

鈴華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使がくれた宝物

【Nコード】

N4080B

【作者名】

鈴華

【あらすじ】

桜は病気になって夢を捨てアメリカから戻ってきた桜は恋をし…
夢い最後を迎えてしまう。

第一話病の帰国（前書き）

あなたは余命1年の人を愛せますか？

第一話 病の帰国

「だいたいま」

と桜が言った。桜は5年間アメリカに画家の勉強をしに行っていた。勉強と言うよりアメリカの方ではすでに有名な画家だった。

義昭は桜を幼なじみだった。

空港で桜を待つていた義昭はなぜ浮かない顔をしていた。

それに気付いた桜は……

「どうしたのお？ 私が帰ってくる事がそんなにいやなわけ？」
と冗談を言った。すると義昭は……

「あゝあ、いやだね。やっと居なくなってくれたと思ったのに」
と言った。

桜は……

「はいはい、すみませんねえ、迷惑で」と言った。

義昭はなぜ空港に桜を迎えに来たかという幼なじみというだけの理由ではなかったのだ。

そして二人は空港を出てある所へ向かった。

ある所とは義昭の働いている病院だった。

病院に着き、車を駐車し、二人は病院へ入っていった。

「じゃあ……少しここで待つてて」

と義昭が言った。 「うん。わかった」

と桜は言った。

それから3分後看護士が来て

「神崎桜さん。2番へお入り下さい」

と言った。そして桜は部屋と入って行った。そこには義昭がいた。

義昭が

「アメリカからの資料届いたよ。見たよ。」
と言った。

桜が…

「そう。で…どうだった？」

と義昭に問いかけた。

「かなり悪くなっている…」

と義昭が言った。

「やっぱりねえ。アメリカでもそう言われた。それで余命は」

と桜は義昭に問いかけた。

義昭は答えた…

「桜…本当に言っているのか」

と言った。

桜は何も言わずに頷いた。

そして…義昭は答えた。

「う…長くて1年、短くて今日でも明日でも可能性がある」

と言った。

「そっか。そんなに短かいだねえ」

と桜は微笑みながら答えたのだ。

そう…桜はなぜ画家と成功していたアメリカから帰ってきたと

いうと…それはもう桜は病気で余命1年だったからなのだ。

第一話病の帰国（後書き）

初めて小説を書くので下手ですみません。もしよろしければ…見終
わった時に評価をおつけください。

第二話 悲しみの再会

「じゃあこれからどうするだ。もうアメリカには戻らないだろう」と義昭は問いかけた。

「うん。日本にいるよ。家も借りたし、好きな事をする。」

と答えたが『もう時間がないから』と桜は小さな声で義昭に聞こえないように言った。

「そうか。入院はやっぱいやかあ。わかった。でもそのかわり一週間に一回は病院にきて診断する。あと薬も出すからな」

と義昭は桜の好きにさせた。それは義昭の優しさである。もう助かる事ない病気になった桜に…。

桜はそれに頷いた。

少したってから義昭が

「そう」

と何か思い出したように言った。

「何。どうしたの」

と笑いながら桜が言った。

「大輝に病気の事言わないか」

と義昭が問いかけた。

大輝というのは義昭の実の弟であり、桜にとっては幼なじみで同じ年あり、片想いの相手でもあった。

桜は答えた。

「うん。言わないよ。言ってもどうせ信じないでしょ」

とふざけながら言った。

でも義昭からみれば桜は大輝に心配されなくなかったんだと思っていた。それはまだ桜が大輝の事が好きだとわかった。でも愛してはいけない相手だと桜はわかっていた。もう長くないから。と桜は心で思っていた。「じゃあ。そろそろ引越しの準備があるから帰るねえ」

と桜が立ち上がりながら言った。

「そうか。じゃあ今日は木曜だから月曜にまた来て」と義昭が言った。

「うん。わかった。月曜日ねえ。了解」

と桜に言った。

そして桜は診察室を出た。病院の駐車場でタクシーを待っていると会っては行けない人に会ってしまった。悲しみの再会だった。それは大輝だった。

「桜…」

と大輝は言った。桜は涙をこらえながら

「久しぶりだねえ」

と元気を装った。

「何でここにいるんだよ。いつ日本に帰ったきたんだ。」

と大輝は声を大きく出した。

「あゝあ。今日だよ。」

と桜が言った。

「今日??なんで突然。絵はどうしたんだよ。まあ…お前の事だからどうせもう飽きたとかなんだろ」

と大輝が言った。

桜は顔が一瞬ひきつった。

「うん。まあねえ。そんな感じかな」

と桜は必死に嘘をついた。病気がばれないように…。

「大輝??」

と遠くから女の人が呼ぶ声が聞こえた。大輝と桜の所へやってきた。それは紛れもない大輝の恋人だった。その恋人が大輝に話しかけた…

「大輝…待った?ゴメン」

と言った。

「いや…大丈夫」

と大輝は言った。

「知り合いの人?」

と桜を見ながら大輝に言った。「うん…ほら前に話した事ある幼なじみの桜だよ」

と大輝は言った。

「あゝあ。アメリカで画家をしてる。初めてまして未来です」と言った。

名前は未来…大輝の恋人だった。

「はい。でも今は休業中ですけどねえ」

と桜が笑って答えた。

「そろそろ行かないと間に合わないぞ」

と大輝が言った。二人は義昭の所に行くらしかった。

「そうだねえ」

と言った瞬間…未来の携帯がなった。

「あ…ちよつと待って。お母さんから電話だ」

と言って少し遠くに離れた。

「可愛い人だね」

と桜が未来を見ながら言った。

「ふ…そうか」

と大輝は照れながら答えた。

すると大輝が…

「結婚しようと思ってるだ」

といきなり言った。

桜はびっくりした。悲しむ余裕のないくらいに…

「そうなんだ。おめでとう」

と桜は言った。

「いや…でもまだ未来にも言っていないだ」

と大輝は不安そうな顔をしながら言った。

「そう…大丈夫だよ。きっと彼女は良い返事をくれると思う。だって大輝といると嬉しいな顔してる」

と桜は言った。

「そうか。まあありがとう」

と大輝はいった。

そして未来が電話が終わり帰ってきた。

「ゴメン。おまたせ」

と未来が言った。 「あ…大丈夫だよ。じゃあ行こうか」

と大輝は言った。

「じゃあな」

と大輝は桜に言った。

未来は軽くお辞儀をした。

「うん。じゃあね」

と桜は大輝と未来に手を降った。二人と別れた桜は大輝に恋人がいることに動揺を隠せないでいたがじっと立っていた。好きな人はずなのに悲しい気持ちを押し殺して泣くのを堪えていた。そう…桜は思った、病気の私は大輝じゃあなくても、もう恋をしてはいけないという自分を必死に受け止めようとしてた。

「もう…大輝を好きじゃいけないんだねえ」

と桜は小さな声で囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4080b/>

天使がくれた宝物

2010年12月25日21時30分発行